

'24 福島県現代詩集

福島県現代詩人会

赤松 幹彦

航跡

なぜ、私ではいけなかったんですか。

突然、発された言葉に私は答えようもなかった。

血を吐くような思いで書いた私の手紙に、何の反応も示さなかったのはきみではなかったのか。

あの頃、私は、何度も何度も手紙を書いた。壊れた陶器を修復するように、微かな可能性の欠片も取りこぼさないように慎重に書いたつもりだった。

だが、返事はなかった。

なぜ、私ではいけなかったんですか。

なぜ、完了形で、きみは語るのか。まだ、何も終わってはいないというのに。

ミラノの駅から鈍行列車に乗り、私はコモ湖に向かった。ジヨバンニ駅で降り、レンタカーに「ウーノ」を選

び、コモ湖の北端を目指した。

湖からアルプスの麓の道を登っていくと、パレットタという小さな村に出る。湖に向かって張り出した岬に、中世の領主の別荘があった。今は小さな山小屋のようなホテルになっており、そこに私は宿泊しようとしていた。

岬の上に、大理石のテラスはあった。崩れた柱廊が、十四世紀からの時間を物語ろうとしていた。

湖の小さな入江が見えた。入江の東側は桜桃の果樹園だった。半分以上散ってしまった桜が、入江に花筏を作っていた。

山の中腹には夕陽に彩られた山桜が赤々と咲いていた。山風が吹きすぎ、誘われるように花びらが舞い落ちていた。

なぜ、私ではいけなかったんですか。

声がふたたび聞こえた。

そのとき、一艘の小舟が入江から現れ、静に花筏の間を通り抜けて行った。櫂を操っているのは十四、五歳の少年のように見えた。小舟は進み、やがて入江の突端の岩陰に消えていった。

私は、ただ、その航跡を見つめていた。

浅井 たけの

白露

九月に入つて七日が過ぎて白露となつた朝の庭に、番の豹紋蝶ひょうもんのおとずれは今年もスマレの葉に卵を産むための飛来。

初めて小さなイガイガの毛虫のような橙色に黒紋の幼虫を見つけたときはいとおしくて胸がときめいていた。

その幼虫が我家の庭から羽化して秋の晴れた日に、ひらひらと健気にも翔び立っていったのだ

生命の連鎖の尊さを見せて。

暦では「白露」というが

何と美しい字の意「しらつゆ」

酷暑の夏を越えて漸く小さな生き物たちが

耐えた人間たちに命を与えてくれる季

僅かに日脚が伸びていく日々

少しづつ秋の風の匂い。

一年が目まぐるしく消えていく我が昨今
その中にも生き物の天に向かつて鳴く声が
澄んで響かせていく風情は、ふと
我に返らせてくれる音魂おとたまのごと。

この青い天も地も

炎え尽きるような災いの果てでも

人の向かう処は水の流れる山野

其処には生き延びるために

命を紡いでいる可憐で尊い生き物たちが

棲息して

正に、白露を迎えた今。

ある勧誘

近頃私の住むコスモス通り界限には
次々と斎場が建てられている

ある時インターホン越しに

若い女性が話を聞いて欲しいと言うので

門扉まで出てみると

近くにオープンした斎場の内覧会を開くので

是非見に来て欲しいとのこと

内覧では何を見せるのかと質すと

式場の内部や設備 祭壇の飾り付けを見て

精進揚げの料理を試食して頂くのだと言う

テレビでやっている棺桶に入るやつかと問うと

それもあります との答え

われわれ高^{としより}齢者はやって貰う立場

そんな事はやるべき者が参加すべきと言うと

そんなことはございません 今は生前に

ご自分の希望する祭壇はどんなものに

更にはお棺の種類 序でに入ってみるなど

実際に体験なされる方が多いのです と彼女

間もなく入らなければならぬ者には

縁起でもないし 勿論見学なんでもっての外

最近斎場も大々的に宣伝し

人の死の儀式が商品になる世の中

五十年位前までは

隣り近所が一切を取り仕切ったもの

そんな内覧会に行く者は 興味本位か

自分の死がまだまだ先のこと

と思っている人達だ と言いつ返すと

今はそうでない方もお見えになられます

もしお気持ちが変わればお出掛けを下さい

ご家族の皆様にも宜しく

と言うが早いか

傍にいたもう一人の女性と共に

ハイヒールの踵を返して足早に立ち去った

あべ 和かこ

暖かな光

古代ギリシャの哲学者は琥珀の静電気を

エレクトロンと名付け

アメリカの大統領は風を上げて

雷が電気であることを発見した

希代の発明王は電球を発明し

やがて発電所を造った

かつて『火』を味方につけて安住できる地と

深い眠りの世界を手に入れたように

人類は『電気』を味方につけて

あまりにも快適な生活を手に入れた

家族が集う居間に

小さな電球の光がポツと灯ったとき

それは確かな希望をもたらしたに違いない

火起こしの作業や火事の危険から自分たちが

遠のく姿が垣間見えたとに違いない

湧きあがってくる暖かさを胸いっぱい広げながら

けれども

人はいつ掌から零れ落ちるほどの光を

欲しがるようになったのだろう

夜空に煌めく満天の星や

太陽のつくってしまった焼け焦げた跡を

優しく癒やす月の光を見るのも忘れて

欲望の光がささやかな幸せの光を呑み込んでゆく

気付くことを思い出せないでいるうちに

そんな道筋が辿る先には終着点のない

数多の悲しみが蠢いている

鷗が翼を広げて悠々と旋回し

朝陽が水面に暖かな光のさざ波を際立たせる

浜風の遊ぶ福島海

砂浜には浜茄子が揺れ

幼子の掌に桜貝の欠片が艶やかに輝く

悲しみを受け止める優しい蒼色の高い空

どんなにか会いたくて、愛おしい場所

天野 行雄

ぽよぽよの比率

ボンネットバスがパタパフヘタンと催眠羊の順番に割り込み

ボンネットバスは枕の厚みにつまづいたからその先のムフムフ

ボンネットバスは夢ぼこりに土けむりを巻き込んでムフムフ

ボンネットバスの拓本にも似た残像やらを映し出している

ボンネットバスが胴長短足をくゆらせながらも丁寧な曲がり

ボンネットバスの苦手とする七折峠の素数段三つ目ごろから

ボンネットバスは曲がり角のカウントに自信を失くすのだった

ボンネットバスはすでに三度で済まないハンドル切り返しだった

ボンネットバスが枕と夢幻の稜線を縫い留めテハフハフと登る

ボンネットバスが厚生病院前の停留所でクスケスパフントマル

ボンネットバスの車掌は容易にボンコツ扉を開かないのは

ボンネットバスのシート席の夢喰いバクを説き伏せるため

ボンネットバスからの感染を除けるまじないはいつも正しかった

ボンネットバスの黒革バッグの合図で解かれる金縛りパツン

ボンネットバスを羊とバクの缶詰に仕立てる朝のルーティング

ボンネットバスが中学の図書館の目録になかったのではなく

ボンネットバスの項目を編纂者が用意しなかったからであって

ボンネットバスは言葉として追いつがる排気ガスのように

ボンネットバスとしての自覚すら存在していませんでした

ボンネットバスはパトカーと競わず強いて挙げればトロリーバス

ボンネットバスとの差別として電気モーターを自慢してたのです

ボンネットバスでの車酔いの多くは後部座席で起こされても

ボンネットバスどころか「バス」さえも表記から省かれましたと

ボンネットバスは中村メイコも讚えていたことを知ってますか

ボンネットバスの飛び出たボンネットは突然に泡を吹くので

ボンネットバスには水の入ったヤカンが積まれていますきつと

ボンネットバスのエンジンは焼けて乗客の懐手と思ひ出を焦がし

ボンネットバスの運転手こそがヒーローもとい憧れの職種でした

ボンネットバスのボンネットは去りゆく哀悼の戒名だったので

ボンネットバスはあの稜線超えから検索が可能になったこと

ボンネットバスがぽよぽよの比率でとなりのトトロに出ていた

雨宮 夢彦

希望

かつて、この僕が、遙か遠くの海外の国々の、とっても瀟洒な貴婦人の身に付けた、とっても瀟洒な希望よ！
で、それは、いったい、とっても豊かな女性の肉体に秘められた、とっても豪華なアクセサリの様な、とっても綺麗な色取りどりの、とっても豊かな色彩感覚に、満ち溢れていたのだ。で、それで、いったい、それらの、とっても綺麗な、色彩に満ち溢れていた 彼女等の、肉体の、奥底に、かつて、この僕が垣間見た、希望に、満ち溢れていたのだ。そして、では、いったい、その希望は、今、この僕が身に付けている、とっても豪華な、アクセサリの様な、色取りどりの、とっても綺麗な、色彩感覚に、違いないのだが、でも、現在、この僕は、その感覚を、今は、もう、忘れたのだ。でも、その、とっても瀟洒な色彩は、今尚、それらのアクセサリの、奥底に、今、現在でも、この僕の記憶では、それらの感覚は、今、現在でも、それらの、女性の、とっても豊満な、肉体の中に、今でも、確実に、存在していたのだ。で、それで、でも、この僕と、それらの女性は、その感覚を、もう失ってしまったのだ。でも、いったい、その感覚は、

今、尚且つ、今でも、尚且つ、それらの女性と、この僕の、とっても綺麗な、感覚に、満ち溢れているのだ。でも、その希望は、例えば、ヨーロッパや、アメリカの、とっても瀟洒な、人々の身に付けている、アクセサリの様な、希望なのだ。でも、その希望は、例えば、イタリアや、スペインや、フランスや、イギリスや、スイスや、チェコ・スロヴァキアなどの国々に、現在でも、確かに、存在しているのだ。でも、その感覚は、今、尚且つ、それらの国々や、アメリカなどの国々に、この僕の記憶では今でも、尚且つ、確かに、現前しているのだ。でも、ああ、その希望は、それらの女性や、この僕の、とっても深い、その感覚の中に、今は、もう、失われてしまい、でも、この僕等は、その希望を、今でも、取り戻そうと、とっても懸命に、努力しているのだ。でも、ああ、その希望は、それらの国々の、とっても深い、魂の、奥底に、今でも、存在していたのに、違いないのだ。でも、ああ、その希望は、もう、既に、失われてしまった様なのだが、この僕等は、それを、取り戻そうと、必死に努力し、そして、では、いったい、この僕等は、その希望を、取り戻そうと、とっても、懸命に、努力しているのだ。ああ、その希望よ！ どうか、僕等の、眼前に、現われてください！ でも、その希望よ！ どうか、男性や、女性の、肉体の中に、どうか、現われて、ください！

伊藤 俊晴

突然のことで

生あるものはやがて死ぬ
驚くべきことではなく

地球と生命の誕生から続いてきたことで
生き物の摂理なのであろう

訃報の多くは突然のことが多い
近況や闘病生活を知らなければ
尚さらのこと 安穩とした生活の中に
突然に遅れて届く

突然のことで声も出なかった
御前（会津薬師寺住職）の奥さんからの電話
御前の死亡を伝えているのに
お互いに『確認』しているのに信じられない

大動脈解離（スタンフォードA型）で
恐らく即死であったであろう
救命救急の対応もむなしく

一命を閉じられた

こんな時も どんな時も
突然のことで

ヒトは喜怒哀楽のバランスを失って
哀しみを越えた怒りや悔しさを感じる

失われた生命の大切さを
かけがえのない唯一の生命を
一度失われたら 取り返しようがなく
ただ ご冥福を祈る

岩田 武昭

オートマテイツクに潰される

自動車は

オートマテイツクに進化した

運転能力のハードルが低くなると

免許が必要な危険な物を

動かしているという意識も下がった

運転がヒマだからと

画面をチラ見しながらクルマを操る

誰かの未来を潰してもかまわない

自分のヒマ潰しのほうが大切なのだ

電話機も

オートマテイツクに進化した

ネット接続のハードルが低くなると

自制が必要な危険な物を

手にしているという意識も下がった

リアルがヒマだからと

画面のフェイクを疑わずスマホを操る

誰かの希望を潰してもかまわない

自分のヒマ潰しのほうが大切なのだ

食料品も

オートマテイツクに進化した

目先の利便性のため

未来にリスクのある添加物を

口にしているという意識も下がった

スマホでのヒマ潰しで忙しくて

作るヒマがないから

添加物でカラダを潰してもかまわない

自分のヒマ潰しのほうが大切なのだ

百均シヨツク

百貨店にあるものは

なくても困らないもの

コンビニにあるものは

ないと困るもの

百均にあるものは

あっても困らないもの

私の存在も

あっても困らないもの？

遠藤 仁

「人々は狂ったナビの中で…」

ある日、私は見知らぬ町に行くために

目的地をナビに設定、主要道を鼻歌気分で走っていたが

突然、ナビが道無き道を案内し始めたではないか

ナビが古いのか、それとも狂っているのか

現在地が分からず進むべき道がまるで分からない

GPSはどうなっているのかと私は焦りに焦っていた

その道はどこまでも真っ暗な道無き道で

行き止まりの道ばかりだった

このまま迷っていては居られない

私は町中を右往左往しながらもナビに頼らず

やっとのことで明るい道に出た

…ところで目が覚めた

しかし、原発の廃炉のナビはどうか

いつになったらあの原発たちを廃炉にできるのか

廃炉までのナビは狂っていないのか

人々は、この先どうなるかも知らずに

三十年後には廃炉にすると言われその言葉を信じた

あの時、何が収束したのか

あれから十三年になったというに

未だ緊急事態宣言は出されたまま

廃炉など始まったばかりのようでも一体どうなるのか

爆発でグラついた原子炉、溶け落ちた燃料デブリ、

どこにも行き場の無い核のゴミ、

原子炉建屋に流れ込み続ける地下水に

これ以上はどうにもならないと人々の理解も得ずに

タンクに溢れる汚染水を海に流し始めた

目には見えずの強い放射能で全く先が読めない中

廃炉のナビはその時々々に狂わされ右往左往している

人々は、この先どうなるかも知らずに生かされ

この困難をどう克服するのか

あの時、避難しても直ぐ我が家に帰れると思った人々は

「どんなに我慢したって生きて居る間などには

戻れない」と諦めつつ

日々目に浮かべるのは涙と故郷の事ばかり

それなのに、まだ老朽化原発の再稼働だ、増設だと

未だに狂い続けるこの国のナビよ

このまま未来への道案内を任せておいて良いのか

人々は、真っ暗闇の廃炉までの長い道の中に

ずうっと迷い込み、取り残されてしまったまま

人々が、心から安心出来る日はいつ来ると言うのか

大山 いづみ

春風にゆれて

うららかな春風に

うたた寝をする

しばし子供時代へと

旅をした

相変わらずの泣き虫

のんびり屋でどじ

そしてわがままな私が出た

泣いてばかりは愛がないと

心細くて胸が痛むから

のんびりしているのは

現実と夢の間に

挟まったままだから

わがままなのは

独りぼっちが怖いから

小さな私はもっと強く
なるべきだと思った

夢から覚めると

相変わらずの私がいるが

色んな想いした分

少しだけ強くなった私がいる

世の中の埃を浴びて

内側の心が傷ついて

埃の中には

凶器や冷たい氷もあって

よけながら 浴びながら

世との調和も

学んだと私と私が頷いている

今も生きている いられる

学びの喜びに

春風と共に微笑んで

小田 敬二

オレゴンからウクライナへ

米国オレゴン州ユージンでは

平和の祭典

陸上世界選手権が行われていた

世界中から集まった

精鋭たちは

より速く もっと速く

より高く もっと高く

より遠く もっと遠くへと

鍛え上げた技を競っていた

そのころ遠く離れた

ウクライナでは

狂った独裁者プーチンに命令された

ロシア兵たちが

人間の尊厳を踏みにじるような

あらゆる残虐な行為を

くり広げていた

北山林道 2

思うのは北山林道

江戸時代に栄えた

旧米沢街道を登り

李平の宿場跡から松川を眼下に見ながら

北山林道に入った

6時間滑っても私たち5人は

北山林道の半ばを滑っていた

でも私たちは元気だった

ヨーコさんのガンバローの声が

林間にこだまし

スキーはよく滑った

10時間かかってようやく

旧米沢街道に合流した

私はまだ若かった

60代の後半だとおもう

菊地 清寿

アクシオンの海 — 未発見の素粒子 —

いつかアクシオンの海を見せてね。

「どんな色をしているの？」

「光りのエネルギーが燃え尽きる色さ」

ニンゲンの想像では

「光りに白に輝いてはいない」

「冷たく色彩を持ってもない」

暗黒な物質なの？

あるのかないのかさえもだれにもいまはわからない

「私たちの身体に蠢いている」

「異国の戦死者の声を聞いている」

「億年一ミリも動かぬ石の下にいる」

そこに空間の本質があり

それを聞きとるの？

きみがそして見つけだせ

いつかアクシオンの海を見せてね。

「回る大原則」

「へ巡る思い」

かくれているの？

ついこのあいだ

喩えられた葡萄の房

そこから落下するひと雫

パーツと

夢のように拡散して

あらゆる海になる

海に浮遊するの？

ぼくはその海に向かって言うだろう

汚染されてゆくきみの裁きが怖いと。

小林 真代

春になったら

今日も戦を知る坂を上り下りして暮らす
このあたりで斬りあいがあり
二人死んでいるが
それでも敵を決して城には入れなかった
その城跡の近く

うまく眠れないとゆうべ遅くに
電話をしてきた人に
会いにゆく道の途中には
戦を知る橋があり
橋の下には川があり
もう死者は数えない
バスの中はほとんど空白だ

風が強い
空のはしっこに雲が集められ
すべての家に死者のあることを
ときどき忘れてはまた思い出す

そのくりかえしを拙く生きる

パンデミックの収束も
これから始まる戦争も
もうすぐ春になることも
きつと気づかないような
あかるい夕方が来ている
白い肌着が乾いて
清潔な一日の終わり

こんな日に手放すのもいいだろう
風に飛ばされても
あの雲のあたりまでは見ていてやれる
そこからはもう見えない
鳥にでもならなければね

春になったら
おこづかいをぜんぶバスカードに換える
そして死んでいないほうの
山のままの山を訪ねる
春は眠くてわたしは
きつとバスで眠ってしまおうだろう

齋藤 和子

メモフロローラⅡ

バラの根を掘っていくとき

地球の芯に向かったか

故里の土を運んで造成した地を突き抜いて

花の命を繋いだ 歴史を重ねた

ぶつとい根つこの先端が見えない

母の摘んだ黄色い野イチゴの春

カツコンバナがカツコウ鳥を呼ぶ初夏

父のホンシメジの城が賑わう秋

故里の記憶を携えて／突き進むとき／バラの

根はイギリス海岸に着いたのでした／我らが

歴史はイーハートーヴに繋がって／森林を抜

けると／阿武隈山系もありました／

故里の山々

イタギ ムゲサク 羽山

陶土を掘った美し森

杉の木が天高く整列した山は

森林コンクールで入賞した父の自慢だった

おめえたちは木っ喰い虫だぞい

娘たちの嫁入り箆笥に着物を誂えた父母

フキノトウ ワラビ シドケ ゼンマイ

マツタケ イノタケ シメジ ナメコ

山鳥 雉 鴨 蜆シジミ 沢蟹

リュウタン センブリ オトギリソウ

アケビ クリ クルミ ヤマナシ

「山を粗末にしてはなんねえ」

曾祖父監一郎 祖父吉一 叔父一郎

山を愛した男たちの口癖を刻んで

被曝の森に転職したおらげの柳一郎は

父祖の地経由で

軽便鉄道に乗って宇宙に向かったか

あの日のメモフロローラ／涙の瞳で／氷菓のよ

うな真実を掴んで跳べ／青い星降る銀河を駈

けよ／続きの根つこで／祈りのバラが青い／

空に吸われし 十五の心

ベットで走り書きしたメモに不來方も見えて

震災後の庭に現れるようになった美しいキジが

イーハートーヴの便りを運んで来る2024年

斎藤 久夫

「タンク」

「タンク」との遭遇という

幼い日の記憶が

脳裡に浮かんでくるたびに

あれは霧のなかの幻影ではなかったのだ

現実の光景だったのだと

そのたびに思いを巡らせてきた

「タンク」が重い音を響かせながら

山際の小学校の横を廻り

川霧のなかへ引き返していった

何故 大きな金属製の車輛が

村の砂利道を走り過ぎていったのか？

敗戦間際 爆弾が落とされたという

橋向かいの 古い町並のことさえ

何にも知らなかった

何故 「タンク」が走り過ぎていったのか？

思い至ることは何にもなかった

誰かにたずねたこともなかった

ただ確かに女の先生が言っていたことがある

黒板の横で窓の外に顔を向けながら

「海の向こうではいま戦争をしているの」と

アルファベットはまだ遠く

走っていった「タンク」の横に

「Z」の標が付いているかどうかなど

思いつくことも

考えつくこともありえなかった

現実だったのか幻影だったのか 記憶の映像と

誕生と死に立ちあった子の 限りもない記憶が

交錯し 眩暈めまいするように足もとが揺れる

一瞬青くスパークし川霧の奥から流れてくる

山間やまあいの霧が光にきらめき生と死が重なっている

海の向こうの村々では泥濘の道で

車輛の侵攻は 殺戮を重ねていた

さわる

見えない放射線に

さわる。

見えないものが

確かにそこに存在するという不安と恐怖に

さわる。

緑の葉陰にひそみ

落ち葉の下にもぐり込み

わたしたちを苦しめる

ウイルスよりも微小なものに

さわる。

見えないものに

ひとは、さわれるのか。

壊れた原子炉建屋から飛散して

天から降りそそいでくるもの。

陽子・中性子・電子という

不安定で揺らいでいるもの。

見えないところに

さわる。

見えない時間に

さわる。

見えない音に

さわる。

見えない国家に

さわる。

だれもさわることのできないものに

ひとは、さわれるのか。

あなたのことばに

さわる。

あなたの激しい痛み

さわる。

あなたのたましいの苦しみに

さわる。

さとう 公子

情けないのは

「おはよう」と声かけると

不思議そうに首を傾げる

「カラスの貫太郎」と

呼ぶと

電線の上で人を見る

そこは 安全地帯

君

「日本語、わかるの」と聞くと

ピョンピョンと地面を飛ぶ

「ゴミ散らかしてはいけなあゝいよ」と

言うと

知らんこつたと無視をする

朝焼けの中を

皆で食料探しに出かけ

夕方には

列をなして寝屋に戻る

カラスは、何でも知っている

この街のこと

食料のありか

ゴミ出しの日

クルミの割り方

カラスは、何でも知っている

風の行方

雲の流れ

雨の降り方

生きるためのすべ

情けないのは

人間

食べるすべの以上の

欲

膨らむ欲望

巨大化する野望

こころの貧乏

足りることを知らない人間を

カラスは

バカアーバカアーと嘲笑い

空の上から

バードミサイルを撃ち落とす

澤 夏子

アリンコと秋虫

秋になったから
アリンコの仕事
もう終わったべー
アリンコ、今年の夏は
よーく働いたもんな
ほめてあげんべ
秋虫もここんところ
ずーっと
チンチン・コロコロと
夜どおし鳴いてるな
秋虫も働きもんだ
アリンコも秋虫も
みんな一所けんめい
働いて く
死んでいく
本望なんだべナ

人間も同じだ。

祈れ

人は生まれ
そして死んでいく
口に出すことはたやすいが
それを現実のものとして
受け入れることは難しい
わめき、ちらし
おのれの不幸を
のろい、うらむ
たとえ鬼と
呼ばれようとも
悪の限りを尽くす
それが人間だ

祈れ

鈴木 正一

消えうせた結

姉は 核災の前の年

六一歳で逝去

秋彼岸 お墓参りのあと

姉の婚家へ伺う

住いと倉は 取り壊され

草ぼうぼうの 更地に

近隣の家々も おおかた更地

立野原組の コミュニティは

完璧に なくなった

農家への嫁入りが

町長から表彰されるほど

珍しがられた時代

それ以来 私は

田んぼ作業の お手伝い

種まき・田植え・稲刈り

するす 等々

姉はそれを結* と言った

あつと言う間に 時は流れ

父母は 私の家族と同居

姉は しばしば父母を

散歩を口実に 連れ出し

婚家で 面倒を見てくれた

家内の 毎日の気苦労を

気づかっていたのこと

私に 結がえし と言って

浪江町 立野原組の 結は

あたり前の 日常の出来事

ここに立つと

在りし日の 両親と姉が

走馬灯のように よみがえる

コミュニティが なくなり

結・結がえしも 消えうせた

帰りぎわ

「気をつけてね！」

姉の声が・・・

ふりかえり 一瞬よぎった想い

核災棄民を知らずに

姉は 幸せだったのかも

*地域の人々が、人手のいる農作業や困った時に助け合うこと

鈴木 淑子

ワンダーランド

いつからか

たぶん 去年あたりから

我が家に 何かがやってきて 住み着いた気配
それが ワンダーランドの始まり

もぐらのように 痕を残さず

音もたてず 姿も見せないから

よほど小さな 小人の類だと想像しているが

私がいなくても居なくても勝手気ままにいたずらし
そこかしこに仕掛けを残していく

閉めたはずの玄関口を半開きにしたり

失くなったオリヴ・オイルを買って帰ると

手つかずの新品を 二本も並べて置いたり

爪切りをさんざん探させておいて

化粧箱の壇の間に隠しておいたり

食べたはずのケーキを 戸棚から出してきたり

彼らのいたずらは増長し 私の心の平穩を揺さぶり
生活のルーティンを乱し
我が家はワンダーランドになった

紅葉がひとときわ鮮やかな夕べ

太い腕が伸びてきて 私を抱きしめた

忽ち記憶が燃え上がり まだ若かった我々がそこに居た

ライトアップされて燃え立つ紅葉の 人群れの中を

二人でゆらゆらと流れに乗って 揺られていく

清水寺の舞台の下の紅葉のまばゆい光の海の夜のこと

あの人の掌の温もりが疼くように甦り

すべてを拭い去って

次なる世界へ向かっていく兆しを 待っている

カロンの躰がこんなにまばゆく華やかで

温かさに充ちているとは 思いもしなかった

迎え人よ しばし 待たれよ

カロンの躰が向こう岸に届くまで しばしの間でいい

燃え立つ世界に包まれ 掌の温もりが消えるまでの

しばらくの間でいい こうしていたい

添田 恒夫

走らない学校

甲子園に

走らない学校があるという

そのチームには

足の不自由なチームメイトがいて

チームのメンバーはみな

彼を愛しているから

心から彼を愛して止まないから

彼はチームのスコア係

みんなのデータを確実に記録し

適切なアドバイスをしてくれる

勝っても負けても

チームは走らない

誰よりも速くスタンドに

駆け寄らねばならないのに

誰も走らない

なぜならチームには

彼がいるから

愛して止まない彼がいるから

甲子園は走るところ

走るべきところ

でも誰も走らない

彼は幼い頃

幼い熱で足が不自由になった

自分の意志に反して

若い筋肉たちはうなっている

腕も太腿も走り出したくてうずいている

でも誰も走らない

チームには愛すべき彼がいるから

皆は今日も

彼を担いで歩く

お祭りのように 担いで 歩く

空野 禅

「恋人坂とわたし」

恋人坂のゆるくてながーい坂道

登り切ると喜多方の町が一望できる

背中に雪解けの力強い水音を聞いて丘に立つ

小鳥の囀りが響き渡り

畦道には草花が日差しの中で揺れる

春

その春に触れる時

白つめ草で編んだ首飾りや

菜の花畑を舞うモンシロチョウ

れんげ畑に大の字になって

見ていた空を思い出す

稲の緑が爽やかな風に揺れ

波打つさまに

潮騒が聞こえてきそうになる

夏

カモメの声や海の香りが

わたしの五感を揺るがす

つるべ落としの夕日が

山の端を真っ赤に染める

黄金色の稲穂の上を帰りを急ぐ鴉が飛ぶ

秋

幼き頃

柿の木の枝に立ち上がり

見ていた景色が蘇る

一面

真っ白になる

冬

何も語らず黙している

優しさを

オブラートで包んでいるかのように

わたしは時々

季節の中で

大好きな場所に何げに佇んでいるけれど

実は

湧き出る思い出が駆け巡っている

それは愛おしい赤子を背負うような

わたしの大切な宝物なのである

高木 弘之

ねじ花

ちらちら寒い時が降り

フレームアウトが近づいて

いきなり息切れ、画面が真っ黒

ふいに誰かの声が見えたり

「デアルカ」と四〇〇年前の

新時代のような上書きを着たりして

ことばの渦だろうか。そこに身を任せていると

突然、昔の時が襲いかかってきて、身震いした

小さな希望なのか。防空壕のような、窪みの洞うろを見つけ

て

やっと入ったが、「ノアの箱舟」であったか

時の水に吸い込まれ、押し流され

上に向かったか、下に向かったか

忘れたどこかの場所に立っていた

そして、探しに出た・・・ねじ花

二〇二三年、私の庭

除染土 フレコンバツク十二袋 地下保管 して

入れ替えされた土のそこかしこに

ねじ花 が咲き始めた

世界中の ねじれ と きしみ 一身に

引き受けて咲きて立つ 小さな ねじ花

「えっ」今の時代 「戦争だって」 日本は

戦争の前に「前の」と過去完了であるかのように

普通の人々が言う・・・戦争

ゲンバクがゲンパツを打つ

日本は「キカンコン」

「キカンコン」は霞が関の 俗語 だそう

だ

こんな上級官庁の上から見た表現

ねじ花は

上から見れば負のスパイラル

下から見れば天空へ昇る螺旋階段

ねじ花 は下から咲き始めるといふ

日本の現在はこちらから見る

薄められた あわいの ちっちゃな感情がうづく

「キカンコン」・・・帰還困難区域

絶対にあってはならない

高坂 光憲

厩橋慕情

ずいぶん前のことで

下駄か靴だったか履物の記憶がない

三筋二丁目の交差点から歩いて行くと

大きなアーチ橋が架かっていた

親柱の名板に厩橋とあった

隅田川だと分かったのは

橋を渡っているとき

下流の橋に総武線の電車の色が見えたからだだった

いつも

その人の姿や表情を

頭の中で

紙動画のようにパラパラめくっていた

昨日の夕方の激しい雨の音は

まだ耳の奥に残っていた

私は雨の音が好きだったが
昨日の雨は心に刺さった

ボデイブローのような

下駄が立てる無機な音がするだけの

厩橋の歩道をUターンして来ると

秋のそらは

そのひとが帰ったときの

海のいろを再演していた

ここを引き越して

知らないところへ行こうと思った

けれど

そらはきつと続いている筈だから

このまま三筋町で暮らすと

歩きながら私は自分に話をした

頭の中の海嶺や海溝のせいで

心はトランスフォーム断層のようになっていて

その隙間を厩橋慕情と洒落て私はアパートに帰った

高野 良一

八月

○ 八月は、六日、九日、十五日

原 民喜「夏の花」を再度読む

最終部「壊滅の序曲」

「暑い陽光が百日紅の上の、静かな空に漲っていた。：
：原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあった。」

一九四五年八月六日午前八時十五分

夏の花天に咲き、一瞬の閃光地を覆い、広島街壊滅、
人類史上はじめての原子爆弾、想像を絶する惨禍

そして、八月九日、長崎で二度目の惨劇

一九四五年八月十五日、ポツダム宣言受諾、敗戦、国民
学校一年の夏休み暑い日だった

その日から何が変ったのか、何も変わらない日常。食糧も
なく飢餓状態、黒塗りの教科書
形だけの民主主義、平和憲法

平和ボケが続き、バブルに浮かれ、バブルがはじけ、気が
つけば差別、格差、貧困

二〇二三年、敗戦後七十八年、戦争を知らない世代が大
多数となった今、三二〇万人以上の犠牲者を出した、あ
の戦争は何だったのか

世界では、ロシアによるウクライナ侵攻、北朝鮮の度重
なるミサイル発射、台湾危機が喧伝され、いまにも日本
が侵略されるようなことが云われ、軍事費の倍増、軍備
の増強等々戦争の出来る国へ、太平洋戦争前のような様
相

戦艦大和は国民の命を守ったか？

トマホーク四〇〇発は国民の命を守れるか？

不都合な事実は、忘れ、かくし、なかったことに
八月を忘れることはないが、この国のカタチに恐怖を覚
える

追記

「敗戦を終戦」「全滅を玉砕」「撤退を転進」「軍隊
を自衛隊」etc 云いかえ

「戦後の平和主義はなんの力も持っていない。」と書
いてある本を読む

高橋 美加子

夢に来た人よ

夢に来た人よ

なぜに私を訪れる

不意打ちのように

あなたは私の夢に現れる

見知らぬ土地をふたりであるく

見知らぬ川のほとりで出会った女性と

あなたは親しきさっぱいの笑顔でことばをかわしている

ここはあなたの町？

置き去りにされた私は途方に暮れる

川の向こうは海

暗い藍色

空は重い

夢に来た人よ

なぜに私を訪れる

なぜに私を誘う

ひとは死という尻尾を付けて産まれてくるらしい
今朝は

それが身体に絡みついて

痛い

滝口 吉雄

冬の木霊

雪の散らつきはじめた山を見ていると
子供の頃の音になる

たとえば

木枯らしの中

木の葉さらいの人たちの

大きな籠のきしむ音

たとえば

今もなお

記憶の辺にはりついている

人里離れた

隙間だらけの我が家の小正月

小さな団子挿しに飾られる

大判小判にはしゃぐ音

たとえば

ある日の朝の

立ち枯れの桑の木に
積ってはくずれる雪のかけらと
囲炉裏の榾ほだの爆ぜる音

或いはそれは
老けゆく日々にとまわりついでくる
哀しみか

竹林 征人

「いつでも夢を」

「恋の季節」

昭和三十八年頃から四十三年頃の間、断然ヒットした歌であり、前者は橋幸夫と吉永小百合、後者はピンキーとキラーズが歌った。

これに共鳴した人達は、国の高度経済成長を支えた働く若者達だった

その大きな社会現象を論ずる論者が居なかったのは残念な事だ

知識も教養もインテリ層の間だけのものではない
社会の底辺で働く人々が熱烈に支持した音楽は、

社会現象という歴史の一切断面を起こしたのであり

その時代の国民のあり方でもあったのだ

その現象がそれだけで終るのも歴史だが、それが現れた時代相を分析し、論ずる姿勢が識者にも無い

それが一億総白痴といわれる由縁でもあることを深く考え反省すべきであろう

現代では大学進学率は五〇%を超え、若者の半数以上が大学に進学する

社会は急速に高学歴社会となり、世代をこえてテレビの娯楽に夢中になるのとは違う社会になっている

そして、インターネット、SNS、スマホ、生成AIは時代の潮流となり、それは新しい経済社会を創るような勢いである

国の政治の行方ばかりが現代史の全てではないことは、衰弱しているとはいえ国民の支持政党なしが最多の四〇%超えて、その自由度は選挙の際の国を左右する力になっている

天皇制という日本古来の伝統とともにありながら政治の歴史は進んで行く

田中 絹子

紅葉の木

蒼空に 燃えるいのちが輝いている

年輪を重ねた紅葉が 緋の衣をなびかせ

晩秋の庭に 歓喜の声を響かせている

声は 争乱の続く地に届くだろうか

熱いものが一筋 胸奥を流れてゆく

東の空に薄く 上限の月が出ている

小春日和がひと際 紅葉を輝かせている

此の夏の猛暑には 緑陰に数羽の鳥を憩わせ

するりと伸びた天辺の枝先に 小鳥が一羽

いつか観た絵画に思いを馳せながら

いま在ることの幸せを 噛みしめている

夕方のテレビが 戦争の一時休戦を告げている

今宵満月 丸い月が輝いている

計らずも初孫の二十才の誕生日に昇った十五夜の月が

決して平坦でなかった道程を祝って 光輝いている
被災した仙台から 夜の山道を家族で逃げてきたのは
小学一年生の三月 余震の度にリュックを手に持ち
庭に飛び出す健気な姿は 忘れることができない
翌々日 原発から漏れた放射能が庭に降り注いだ

冷え込みが増してきた朝

ガラス戸越しに かすかに届く声がする

これから訪れる別れの季節への挨拶なのか

時の巡りの営みに 枝を離れる赤葉たち

あの日から 過ぎ去ってゆく時間がたゆとう傍らで

紅葉の木は ひたすら時を畳んでゆるぎない

天地を敬う

虫たちははね 祖^{おや}たちの生まれ変わり
神さまとんぼは虐^{いじ}めてはいけないよ
川には神さまがいるのだから
オシッコをすればチンポが曲がるよ
トイレを掃除する子は
神さまがベツピンさんにしてくれる

そのことを本当のことだと思おう

因果応報

どこに因があり どこに果が現れるか
問うこともなく
日の出が届けば
明るくなる心のように
天地^{あめつち}とは自分のことだった
あらゆるものに
神仏が添^そっているならば
心は和^{なご}やかであってほしい

そこが荒んでおれば 人も ものたちも
他を顧みない心で生きるだろう
やましさが無いことに
素朴な心の規範があった
頂いたものには
お返しをすることも務めだった
そうしたお返しには
山川草木を敬うことも含まれていた

十五夜月

お月さまは 三日月
八日月 十三夜
やがては 満月になるために
友だちのように見上げていて
いざ 十五夜のお月さまは
夜道を照らし
空はれやかにありながら
おまえも一人 わたしも一人
どうして しみじみ
淋しいのだろう

青天目 起江

後姿に捧ぐ

少なくとも三つの顔を持つ人だった。

給与を得る仕事と、家業では地域のために尽くし、熱い趣味も持っていて支部の会長まで務めたらしい。

そうそう、肝心の、一人の男して、三人の子の父という顔も忘れてはいけない。

盆や正月に会えば、口数少なで静かに酒を楽しんでいた。お宅にうかがえば、相変わらず庭はきれいに整えられ、近年は足が悪いのか、それでもダンボールを地面に敷いて、膝について草むしりをしていた。

寒さも落ち着いた春のころ、穏やかに手を振りながら、こちらを見ることもなく、日だまりの下を行ってしまっ

た。

自分の父と同じように、その人も戦争で「父」を失った事実を知った。

自分の父だけが苦勞したのではなかったと思うと、どうしてあんなに話しぶraitと思ってしまうのか、惜しく思え、自分の至らなさを改めて痛感すれば、なぜか打ち消すようにやわらかな風が吹く。

たどり着いた向こう側では、ずっと会いたかった人たちと再会できて、きつと会話も弾んでいるに違いない。これからしばらくこんな機会が多くなると思うと、寂しくもあり、自分の果たすべき顔は何なのかを考える。けれど、向こう側でみんな、後姿ではなくこちらを向いて、「まだまだだ」と、顔をほころばせながら、叱咤激励してくるから、「もういっちょがんばるか」と息を吸い込んで前を向いた。

二階堂 晃子

朗読という舞台

横たわっていた文字は

立ち上がり 動き 舞い始めた

灯りを落とした講堂に

朗読という

音が 映像が

生き物を操るように

その世界を生み出していく

我が作を声優が読む

発せられた音声は

情景を 想いを 有様を

見えないスクリーンに映し出し

静まり返った

あまたの五感に行き渡らせる

うねる海

木々ざわめくふるさと

悲嘆に揺れる人びと

見えない物語の世界に引き込まれ
駄作が名作に化けていく
文字を超えて

あの時 あの場が浮かび上がっていく
朗読というすさまじい技

書き手の想いのたけを 届けるモメント

自作を超えて胸に迫り

深く 強く 波打ち

朗読という舞台に載せられて 再び現れる

あの日 あの場の あの大气

溢れるままの涙の向こうに

湧き出でてくる 淡い光

「超えよ」と 背を押される

朗読という舞台に上げられて

浜津 澄男

東京砂漠

今日は、私と女房で営んでいるラーメン店の定休日である。久し振りの秋晴れである。

女房の手配で、郡山文化センターで行われる「前川清と川中美幸のコンサート」を観る予定である。

ここ数年のコロナ禍、今夏の猛暑などで、客数が減り、更に、食材、光熱費などが、値上がり、店の経営が、苦しくなっている。公の給付金も何度か受けた。

それでも、最近、ようやく、コロナ感染が収束しつつあり、常連のお客様が、「久し振りです。頑張って営業していますね。」などと、言っ、来店してくれるようになってきた。少し明るい光が、見えるようになってきた。

文化センターから少し離れた駐車場に、車を入れ、会場に向かう。途中、女房と二人で公園を歩く。秋風が、清々しい。横断歩道を渡り、会場に入る。

約二千人、入れる、大ホールは、ほぼ満席で、中・高齢者が多い。少しずつ上がっている熱気が感じられる。

幕開けに、スーツ姿の前川清が、「長崎は今日も雨だ

った」を丁寧な歌った。振袖姿の川中美幸は、「ふたり酒」を、情感を込めて歌った。〈生きてゆくのがつらい日は、おまえと酒があればいい 飲もうよ 俺とふたりきり・・〉思わず、拍手をしてしまった。

懐かしい曲、初めての曲など、心に沁みる曲が、多かった。合間に交わした、二人のトークも、とても楽しかった。

前川清が、淡々と歌った、「東京砂漠」が、強く心に残っている。〈空が哭いてる 煤け汚されて ひとはやさしさを どこに棄てててきたの・・あ、あなたがいれば 陽はまた昇る この東京砂漠〉東京で生きる淋しさ、愛の大切さを、歌った名曲である。

熱気が溢れる、大ホール、多くの拍手でコンサートは終了した。

私ら夫婦に、三人の子供がいる。息子が一人、娘が二人で、三人とも、東京・横浜で家族を持ち、生活している。それなりの苦労は、していると思う。

帰路、車の中で女房がスマホで、今日のコンサートのことをラインで、息子や娘らに送っていた。

廣川 秋男

まあだだよ

少年の頃

隠れんぼして

まあだだよ まあだだよと

出たがる心を押さえていた

大きくなって

何度か子らたちに

まあだだよ まあだだよと

何かをする度に

危険や障害物を見つける度に

まあだだよと

孫娘と遊んでみる度に

まあだだよと

何事にも安心する為に

この頃隠れんぼの遊びがなくなって

歯止めの効かない世相になった

まあだだよ まあだだよと

誰も言わなくなった

乳母車

乳母車の歌を聞いたことがある

車輪のない乳母車の歌だった

車輪が無いので転がって

行くこともなかった

ガタガタの音もしなかった

村の夕暮れ陽が沈む頃の

柔らかかなやさしい母の

まあるい乳房の乳母車

それに抱かれて僕は

静かな深い眠りについた

メロデーが流れていた

あの頃流行った子守歌だった

そのとき母は唄っていた

夕日に映える乳母車の唄を

目覚めると母の

温もりの肌だった

あの時集落を包んで

秋の夕陽が真っ赤に

車輪のない乳母車を包んでいた

母が歩き出すと

やさしい車輪の音がした

福西 トモ子

記憶のなかで

いつしか 季節は移り

雪が会津の野山を

白一色に染めていく

夫を送ってから二年になるが

私の記憶のなかで

夫はまだ色鮮やかな季節の

なかにいる

夫は幼い頃

父の仕事のために

中国の清朝に渡っている

小学校には毎日 幌付きの馬車に

乗って通った

それもつかの間 戦争がはじまり

生きて日本に帰れるかも

解らない地獄のような日々を送った

ロシア兵に金品のすべてを

奪われ 学校にも行けず

母の手作りの飴を姉と二人で
街頭で売って生き延びた

夜は銃弾の音に怯えながらも
必死に生き延びて

ようやく日本に帰ることが出来た

夫はそうしたなかでも若いロシア兵と

仲良くなりロシア語を覚え

帰国するころは

彼らと会話ができるまでになっていた

日本の港について

DDTを全身にかけられ

やっと日本に帰って来たことを実感した

それから間もなく夫の父は

四十五歳の若さで亡くなり

夫は母子家庭で育ち自立した

時折 夫は私に懐かしむように

少年期の辛酸を語って聞かせた

今はそれも私の記憶のなか

前田 新

人間の狂気

二〇二二年の二月

ロシアのプーチンによるウクライナへの

武力侵攻に続いて二〇二三年十月

イスラエルのネタニヤフは

ガザ北部の空爆を開始した

一か月が過ぎた今

空爆によるガザ地区の死者は

一万人を超えた

ハマスが潜むという理由で

住宅、病院、学校、救急列車

国連パレスチナ難民救済事業機関

(UNRWA)の施設まで

空爆は無差別に行われ

被害者の七割が子供と女性だという

このジェノサイドを人類は

なぜ止められないのか

イギリスのBBCは

この戦争を仕掛けたのは

パレスチナのハマスが
先でイスラエルの空爆は

それに対する反撃だと報道する

また、ブリッケンが飛び回っても

その役割は十年前の

オバマのときに終わっているという

それはどうでもいい

生きている人間の命を救いたい

人を殺戮することに道理はない

殺された者の遺恨が報復として

殺したものの子孫にとりつくだけだ

それは人類の歴史が示している

ネタニヤフはまた、核兵器の使用も辞さない

と、プーチンと同じことを言う

二十一世紀の人類史に

人間の狂気がこんなかたちで

現れるとは、私には想像を超えたが

故大江健三郎が一九六九年に

小説「われらが狂気を生き延びる道を教えよ」

を発行して、このオーデンの詩句とともに

時代を一人の人間として

生きてきたと記した

松坂 佳生

春の音

立春が過ぎて

寒気の動きが

自然の隙間から少しずつ

西の方向に流れていく

神がその先の兆しを感じ

グラデーシヨンのように

寒冷の空間を開き始める

言葉と心臓を持った生物が

心身と生活のリズムを躍動させ

そこから生きている原点が動き出す

五月晴れの陽だまり

樹木は薄緑色に芽生え

小鳥たちは 陽春の歓喜の中

宙に向かつて翼を広げた

回りはたくさんの花々たちが

光と水に体をゆだね

六種類の薔薇が気品よく咲きほこっている

自宅の庭に植えてある

細くて低い鳳仙花ほうせんかの茎に

一匹の虫が立ち止まり

近い未来に向かつて時間をたべている

自然の動きは

生物たちに

生きていく足音を残し

人は生きている尊さを素直に噛み締める

春彩が

大気の間隙から流れ始めている

夏がスキップしてそこまで来ている

みうら ひろこ

#カードサギ

カードサギに会ったみたい

私のボヤきに

筋トレの仲間達が笑う

キヤッシュカードの事ではないと

みんなわかっているから

同情の笑いではなく同調の笑いだ

私の場合

避難している自治体からでも申請すると

ふる里の自治体に置いておく

戸籍や住民票などが取り寄せられる

という甘言を信じ

作るつもりもなかったマイナカードを手にし

住民票をもらおうとしたところ

自治体間のナンタラカンタラでダメとのこと

だからいちいちふる里の役場まで出向き

申請書を出さないともらえないのだ

ナンダイ ナンダイ

私にとっては何の意味もなさないマイナカード
「サギ」に会ったようではないか

今ならポイント一万つきます

それこそ甘言に乗せられた日本の民

あちらこちらでトラブル発生

それでも首相※は強気に

健康保険証をマイナカードに移行すると会見

みてみな そのうち

受けてもいない手術やギプス等が明記された

他人の保険使用の明細書が郵送されて

またトラブル発生しなければいいがと

筋トレ仲間内の婆サマ達が心配しきり

※岸田首相

コールサック115号掲載作品一部改正

油井 憲一

ハグ

幼稚園生の頃

運動会の五十米走で入賞して

大喜びでママの所に走って行ったら

ハグされたのを覚えている

遠い遠い記憶なのに、

昨日の出来事のように覚えてる

小学生になると

ハグは握手に変わった

今妻は昨日と今日の

境が分らなくなつて来ている

それでもハグすると我に返る

恋人時代を想い出して

ありつたけのうれしさを全身で現わす

米寿の頃の愛の物語り――

泣く

幼児の頃は「食」が細いと

よくママに叱られた記憶がある

小学生になってからは

勉強しないで遊んでばかりいると叱られた

高校卒業までは

自分自身の遊びぐせに泣かされた

社会に出ても

営業の棒グラフに泣かされ通しだった

定年で親父の後を継いでも

駄農で泣かされた

ところが米寿を迎える頃になって

娘たちの世話になつている事に感涙した

泣くことって素晴らしい

今ここは竜宮城――

若杉 縷縷

充実感

一行詩作悩みながらも充実感

わたなべ えいこ

発起人はいないのに

きょうは三月十一日

海岸を埋め尽くした人たちが
海を

住居のあつた方向を

眺めている

なかには

隣の人と手を取り合つて

二人の間には再会を喜ぶ雰囲気はなく

悄愴感だけが漂っていた

きょうは

私たちが

不本意に命を奪われた日

東日本大震災と命名され

たくさんの命が地上から消えた

発起人がいるわけでもないのに

三月十一日になると

海底から集まった人たちで

砂浜が見えなくなる

みんなの視線の先には

初めて目にするような

すっかり変わった光景が広がっている

その場所に足が進まず

まるで

浦島太郎の気持

歳月は

いろんなことを変えてしまふのか

あの日を忘れないため

今年も

来年も

再来年も

永遠に

呼びかける人はいなくても

その日は

この海岸に集まるだろう

大勢の人で砂浜が埋まるように

渡辺 孝行

あの人がきて

その日 あの人がきて

彼のことを話してくれた

じつはどんな人で なにをしてきたか

いまはどうしているか などなど

ことばにできないようなこともあり

そこはピアノで弾いたりもできたはずだったが

ここでピアノはならぬ というので

その人は苦勞して 工夫して 話してくれた

じつはその人は 音楽家だったので

ついには うたつてくれたりもしながら

うたになることばがぼくの好きな詩で

そんなことばを探して読むんだと 朗読してくれた

じつはその人は 彼の息子で

彼のことはもうだれもがよく知っていたので

すっかりうちとけあつて 知らないことを

なんでもありのままに おしえてくれた

彼はもう卒寿を越えているので

その介護に追われながら ぼくはどうしているか

あるある なるほどと いわずもがなの一同

笑いあい 弾けあい いやいようちとけあつて

外のどしゃ降りの雨のことなど忘れて

彼のありのままの健在ぶりをよろこびあい

再会を約しあつて 別れたのだった

それぞれの 億光年の 夜空の方へ

編集後記

日本で最初の新型コロナ感染者が確認された令和二年一月から四年が経過しました。

この間、行動制限に伴う遠隔勤務・遠隔授業の広がり、宴会や旅行の自粛、東京2020オリンピックの一年遅れの無観客開催など、新型コロナの影響は甚大なものがありました。無論、実際に感染したり、ワクチンの副作用で苦しんだ方も多いと思います。

しかも、この四年間は、ロシアのウクライナ侵攻や中東での武力紛争など、平和の尊さを再認識させられる出来事があった一方、温暖化による猛暑や円安に伴う物価高など、実生活の上で痛感する変化も多かったように思います。

また、福島県では震度六強の地震が二回発生し、能登半島は先日、震度七の大地震に見舞われました。

何かと暗い四年間だったように感じますが、野球の大谷翔平選手や将棋の藤井聡太八冠の大活躍など、明るい話題も数多くありましたし、昨年五月に新型コロナの法的位置づけが変わり、以前と同じ日常をほぼ取り戻すことができたのは何より嬉しいことでした。

さて、今年はどういう年で、夏季オリンピックの年でもあります。

二〇二一年の東京オリンピックは無観客で全く盛り上がりには欠けましたが、パリオリンピックでは、エッフェル塔やセーヌ川などを舞台に、いろいろな演出が行なわれるようで、今からとても楽しみです。

できればパリの現地じかで直に観戦したいものですが、なかなかそうもいかないのです、家でゆったりとオリンピック観戦を楽しみたいと思っています。

時代の流れや物事の変化のスピードが早くなっているような気がしますが、このような時代だからこそ、楽しみや寛ぎを大切に過ごしたいものです。

私は先日、アンソロジーの素晴らしい詩を拝読し、一年のスタートを気持ちよく切ることができました。

今年が（今年も）皆様にとりまして、よい年でありますように。
（あべ 和かこ）

* * *

お正月の能登地方での地震発生は大変大きな災害となりました。3・11に見舞われた時、お世話になったことを思い起こし、心ばかりですが募金で気持ちを示させて

いただきました。多くの方々の困苦が一日も早く回復されますことを祈るばかりです。

「2024福島県現代詩集」の発行にあたり、会員の皆様の作品が一堂に会して内容豊かな詩集として上梓できましたことをうれしく思います。詩で表現することの喜びを確かめ合い、思いを残していく財産が一つの形となって今回も実現できたことに感謝します。

当会にとって、詩を書くことが好きな会員全員が、作品を発表する場として詩集発刊の活動はもつとも大事な取り組みであると思います。今後もずっと継続されることが望まれます。

今号は、渡辺事務局長を中心に県北地区の担当で進めてまいりました。会員のほぼ全員の方々が作品を寄せてくださいましたことに厚く御礼申し上げます。

これからも健康に留意し、作品作りを楽しんでまいりますよう。
(二階堂 晃子)

* * *

ご健筆を奮って玉稿をお寄せいただいた皆さまに心からの敬意をもって感謝申し上げます。今回はじめて、県現代詩集発刊の始終に携わらせていただき、託され、手

にしたそれぞれの作品の重さ、皆さん一人ひとりの存在のかけがえなさを実感した気持ちの高ぶりから、これまではそう呼ばれることにどこかいたたまれないようなおもしろいも感じていた「玉稿」という言葉が、けして作法にとどまらぬ一期一会への感動と感謝からの掛け値無しの呼び名であったこと、熟熟味つくづくわわせていただきました。これまでになかったようなご負担をお願いした手前もあり、初校戻しの封書を取り出す度に押し戴くような気持ちでいっぱいでした。本当にありがとうございます。

そんななか、原稿を受け取ったあととどなく知らされた安部一美さんの訃報には声を失いました。「勧誘」に体言された不条理を見送る安部さんの立ち姿を髣髴させる、遺作となってしまう作品を読み返しながら、近年あまりに身近となってしまう無常の念をかみしめていきます。ご冥福を祈るばかりです。合掌

これら正真正銘の玉稿四十七作品を編んで、万感の『24福島県現代詩集（第45集）』を無事発刊することができました。うち2作品は県詩人会未加入のかたからの応募です。あらためての心からの感謝とともに、皆さまのますますのご健筆を祈りつつ、第45集を発刊し得たよろこびと不滅の詩魂を共にすることが出来るならば編集冥利に尽きます。
(渡辺 孝行)